FADO

Abril 2006 月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDECO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日・・・

ちゃんと春が来て、桜が咲き、あっという間に、新緑のまぶしい季節に なった。そうこうしているうちに今度は「暑い暑い夏」の訪れだ。

柔らかな若葉に、私は、青春の頃を思い出す。ひたすら走り、駆け抜けたあの青春の日々。人を傷つけ、自らも血まみれになりながら、それでも走りつづけた。あの頃、自身の残酷さにも気づかなかったのは、未熟であるがゆえ許されることなのだろうか。若者達の眩しいほどのエネルギーを、目を細めながら眺め、彼らに追い越されてゆくわが身を、惨めと思うこともあり、いとおしく思えることもある。

以前に比べ、何か、物腰が柔らかく、高飛車に構えなくなったように 思った。でも、鏡に我が姿を映してみて気がついた。それは単に姿勢が悪 くなっただけだということに。下腹に力を入れ、胸を張ってみる。それだ けで、呼吸が楽になる。声にも張りが出てくるから不思議だ。

前号での「関西ライブ休止宣言」で、皆様にご心配をお掛けしてしまいごめんなさい。

お手紙、お葉書、ファックス、メール、お電話にて、たくさんの励ましのお言葉、元気付けのためのお酒、ワインもいただきました。こんなにもたくさんの方々に支えられて今の自分があることに、身の引き締まる想いがしました。ありがとうございます。

2月の関西でのライブは、シャンソンを歌っていた頃のピアニスト釈恵 一氏が、伴奏を務めてくださり、何とか無事幕を下ろすことができた。

ギタリストなしに、お越しくださった皆様に、どうやって私の歌を届けたらいいのか、下手なギターの弾き語りと、酒を酌み交わしつつのおしゃべりライブで勘弁してもらうしかないと半ば諦めていた矢先のことだった。

釈氏の登場により、彼のピアノ伴奏による「インシャラー」「暗い日曜日」「かもめ」「スカーフ」等のシャンソンを20年ぶりで歌うこともできた。そのライブを聴いてくださった方の「ピアノでのファドでもいい、何でもいいから歌いつづけて欲しい」とのありがたいお声も心に残っている。

心配して最後のライブに馳せ参じてくださった皆様、ありがとうございました。

その後、ブズーキ等様々な民族の弦楽器奏者酒井淳氏、スパニッシュ・コネクションのヴァイオリニスト平松加奈さん、今年から芸大一年生の伊賀拓郎君、京都在住のギタリストM氏、様々な方々との出会いがあった。

そんな中で、今、私は、ボヘミアン的な立脚点から、もっと自由にファドを模索してゆきたいと思うようになった。私が伝えたいのは、ファドの「形」ではなく、「心」なのだからと、そのことが明確に表現者としての私の心に刻まれつつある。

「春は必ずやって来る」例年になく厳しい冬の寒さの中で凍えながらつ ぶやきつづけた。そして、今、季節は春。今年も、春に置いてきぼりにさ れた月田ではあるけど、私の心の中の「春」も、きっといつか芽吹くはず だ。

<ふたりの加奈ちゃん、ありがとう!>

ポルトガルギターが抜けたマヌエルでのライブに、3月はヴァイオリンの平松加奈さんが、4月はチェロの竹花加奈子さんが、ギターの蓮見昭夫氏と共に、私の歌を支えてくれた。

特に、ポルトガルギターに代わって響き渡った彼女達のヴァイオリン、 そしてチェロの演奏は、かなりの新鮮な驚きでもって迎えられ、そして確 かな感動のため息が、一曲一曲終わるたびに、私に還ってきた。

事実、彼らがステージに向かう時から拍手が湧き起こり、ステージを重 ねるごとに、従来は酒量に比例して会場がざわつき始めるのだが、真剣に 私たちの演奏に耳を、そして心を傾けているお客様の熱が伝わってきた。

3月7日の四ツ谷「マヌエル」での出来事は、忘れられない。ギターの蓮見氏の的確なリードに、平松加奈さんのヴァイオリンが人の声のよ

うに、うめき始めたかと思うと、次の瞬間、ツバメのように私の目の前をかすめ、舞い上がり、今度は、うねる波のように、私の心に押し寄せてくる。その響きに私の背筋はゾクゾク、心の闇の中で眠っていた悲しみや喜びが息を吹き返した。歌っていることを忘れ、私もいつしか波になり、鳥になっていった。初めての体験だった。私をしばりつけていた「ファドはこう歌わなくてはいけない」、という呪縛のようなものが、その時解けたような気がする。それとともにポルトガルギターへのこだわりも、氷が溶けるように私の心から消えていた。「ああ、私は生きられる」久しぶりに心か晴れ渡ってゆくのを感じた。

4月は、チェロの竹花加奈子さん。クラシック畑で育った彼女に、レストランで演奏してもらうのは申し訳ない思いで一杯だったのだが、2週間後に控えた五木寛之氏とのコンサートの半ば練習を兼ねて、「マヌエル」に出演してもらった。ポルトガルギターが抜けた分の殆どを彼女にカバーしてもらった。圧倒的な存在感のある演奏に、最後のステージまでかなりのお客様が残ってくださった。

これからも、時々彼女達に入ってもらってライブコンサート活動を続けてゆきたいと、心ひそかに願っている。

<レクチャーコンサート奮闘記>

1月の横浜・朝日カルチャーセンターでのレクチャーに続いて、2月は大阪阿倍野市民学習センターでレクチャーコンサートをさせていただいた。100名近い聴衆を前に、「おしゃべり」と「ファド」の弾き語り6曲 (「難船」「悲しいポルトガル」「バイロネグロの少年」「アルファマ」「私の中のファド」「暗いはしけ」)で何とか休憩無しで2時間にわたる講演を終了した。最後は、どうしても歌いたくなって、ファドから離れたチリのフォルクロリスタ、ビオレッタ・パラの「人生よありがとう」で締めくくった。講演に来てくださった人たち、熱い想いで出演を依頼してきた河田和美さんへの感謝の思いが昂じてきた結果の思いがけない幕切れだった。

レクチャーコンサートの一件、それは、主催者の阿倍野学習センター の河田さんから届いた以下のメールから始まった。

「初めてメールいたします。本来は直接お電話でご相談させていただきたかったのですが、うまくご連絡がつかずに、メールで失礼いたします。月田さんのことは元上司でした、西本南海男さんにより15年前に知りました。その西本さんも他界されて3年が経ちますが、お元気だった頃にはサンケイホールやアートクラブでのライヴは数回、三裕の館では貸切状態で最高に贅沢なライヴも経験させていただきました。月田さんと出逢った瞬間、音楽のファドの神様が見えたように思いました。それほど月田さんが歌われるファドには感動を超えた魂を激しく揺さぶられる不思議な力を感じます。言葉ではうまく表現できないのですが、奥深いところから静かに、そして激しくこみ上げてくるものがあり、懐かしい気持ちとともに、その力強さに忘れかけていた勇気と優しさを思い出させてくれます。そんな月田さんご自身のファドに対する想い、伝えたい心を当センターの講座で語り伝えていただけたらと心からご出演をお願いしたく添付ファイルにて依頼書をお送りいたしますのでご検討のほどよろしくお願いいたします。

横浜のカルチャーセンターの講演を引き受けたのも、担当の石井洋子さんの「学術的というよりは、あくまでも月田様の感じるファドについて伝えていただきたい」という一言に心が揺らいだからなのだが・・・。両人の熱意が私の重い腰を上げさせたと言っていいだろう。とはいえ、座礁してしまった船のようなその頃の私には、何が話せるのか、何が伝えられるのか、想像するだけでも怖くて逃げ出したい思いで一杯だった。後日、回収したアンケートが送られてきたが、かなりの反響のよさに、「やってよかった」と胸をなでおろした次第。根気よく私の話を聴いてくださった皆様、マイク無しの歌声に耳を傾けてくださった皆様、そして、私を引っ張り出してくださったお二方に、心から感謝している。

ここ数ヶ月の月田秀子に思うこと…

小島 智

CDを聴いてコンサートに通い、それについての記事を書くこ とを生業とするような人間にとって、仕事を離れて純粋にいい と思える音楽と出会えることはとても嬉しいものである。考え てみれば音楽評論家などという稼業を続けてこのかた、心のど こかでそうした出会いをずっと求めていたような気がするのだ が、そんな意味で数年前にリスボンでファドの面白味に生で触 れるチャンスに恵まれ、月田秀子という素晴らしいファディス タが日本にいることを知れたのは本当にラッキーだったと心か ら思っている。損得はまったく抜きで付き合える、いってみれ ばライフ・ワークとしてこの先いつまでも見続けたいアーティ ストと久しぶりに巡り合えた...、そんな暖かい気分を彼女は確 かに抱かせてくれたのだ。

さらにラッキーなことに、ステージに足しげく通ううちに、彼 女とは親しく言葉を交わせるようになり、酒席をともにする機 会も何度かできた。そんな席での話題も彼女は豊富で、人を敬 う気持ちを忘れない謙虚な性格もあって、グラスを囲んだ数時 間は、いつも充分に楽しませてもらっているのはいうまでもな い。このところ少しばかり彼女の酒量が落ちているのは気にな るが、時おり持つことのできる彼女とのそうした時間は、今で

はかけがえのないものになっている感じだ。

そんなファンの一人として、昨年末をもってポルトガル・ギターの上川保氏が脱退したことは本当に残念だった。彼女にと っても大きな痛手だったようで、その前後にはそのことでずい ぶんと悩み抜いていたのもよく覚えている。年が変ったばかり の頃だったか、誘われた酒席で何度となくメンバーをどうする かについての相談を持ちかけられたこともあり、そのたびに何 か力になれればと、助言...、と呼べるほど大したものではない が、個人的な観点からの意見も伝えた。さらに、日本では数少 ないこのギターの弾き手が出演するコンサートがあると、一緒 に"偵察"に出かけてみる、なんてこともあった。そんなふう にして助力を求められることは嬉しくもあり、その際の彼女と のやり取りも、もちろん楽しみはした。しかし反面、フィット するギタリストとなかなか出会えないことでさらに悩みを深く する彼女を見るのは正直なところ、少しばかりつらいことでも あった。

それでも、3月に入ったあたりからだったか、彼女もずいぶ んと気分を持ち直す気配をみせてくれるようになった。聞くと ころによると、スパニッシュ・コネクションなるバンドのヴァイ オリニストである平松加奈女史と『マヌエル』で共演したこと がインセンティヴになり、それゆえで新たな意識が生まれたの がきっかけになったらしい。残念ながらその日のライヴは見逃 してしまったのだが、女史の豊かな表情を持ったプレイは多く のインスピレーションを彼女に与えたようで、「ポルトガル・ギ ター十ギターというスタイルにこだわらなくとも、ファドは充分 に表現できる」という考えも、それからは自然とわき上がって きたという。以後、弱冠20歳の若いピアニストやクラシック出 身のギタリストなど、さまざまなミュージシャンとリハーサル・ セッションを彼女は積極的に試みるようになった。そして、そ うしたいくつかの出会いについて語って聞かせてくれる時の彼 女の表情からは、さらに意識がオープンになっていることがは

っきりとうかがえるようになり...。

もちろんポルトガル・ギターをバックにオーセンティックな ファドを唄うことを諦めたわけではないだろう。個人的にもそ の編成による彼女のファドは近い将来、必ず聴きたいと強く望 んでいるのだが、同時にこうした変化は、素直に歓迎したい気 持ちになっているのも事実だ。そこには、伝統的なファドを愛 する気持ちを一つの指針にし、そこからさらに発展した、自分 なりのファドを見つけようと摸索する前向きな姿勢が確かに伝 えられていた。もっといえば、転機となった上川氏の脱退が呼 び込んだ出会いを結果的にポジティヴなものに変えてしまった わけであり、そのあたりに彼女のアーティストとしての、根本 的なたくましさみたいなものがつぶさに感じ取れたからだ。

ここ数ヶ月のそんな彼女を見ていて感じているのは、意外に も...、などといっては失礼なのだが、彼女自身、実際はとても 身軽で、確かな柔軟性をあわせ持ったアーティストだったんだ... なんてことだ。その身軽さはファドという、限りなく生の状態 で唄い継がれた音楽に傾倒することで身についたものではある のだろう。そして柔軟性のほうは、どんな条件のもとでも自分 をアピールできない限り、ファドなどというコアな音楽を日本 で唄い続けることはできないといった、ある種の開き直りに似

た意識の裏返しなのかもしれない。しかしながら本当に人の心を打つ優しさと強さを持ち、後世に残っていく説得力をも兼ね 備えた音楽というのは往々にして生の歌がキーになったもので あるわけだし、その生の歌も、シンガー自身が自分を突き詰め て、葛藤を何度も繰り返すことで円熟味を増していくものなの だ。昨年後半から続いたメンバーに関するさまざまな試行錯誤 を通して彼女はこうした、音楽の根本的なあり方みたいなもの を無意識のうちにしっかりと学び取ったのではないかと思う。こ のところの彼女の歌は、心なしか力が抜けているように感じら れるのだが、個人的にはそれもその習得の表れだと思えてなら ない。いずれにしろ新たな局面を迎えつつある、そんな予感を 今の彼女からは確かに抱くことができ、そのことが熱烈な支持 者としては、何よりも嬉しい。

余談ながら、これまで何回かともにした酒席はだいたいが彼 女からのeメールでの誘いによるものなのだが、その誘いも、「も し今晩ヒマならば...」だとか、「明日の夕刻、時間があるからよ ければ...」などといった、ひどく急なものが多い。思い立った らすぐに行動したいということなのだろう、こんなあたりも彼女 の身軽さの表れであるように思う。そういえばいまだ上川氏が バックを務めていた2004年の暮れのこと、実はマカオで行われ たコンサートにも同道する機会があったのだが、この時も彼女 は昼間ずっとメンバーの観光に付き合い、会場では本番直前ま でワインを片手にリラックスした時間を過ごしていたにもかか わらず、ステージに上がると見事にスウィッチを切り替えて妖 艶なファディスタと化し...、その変身の鮮やかさには新鮮な驚きを覚えた記憶がある。ともあれ彼女はここに来て、どんな状 況下でも彼女なりのファドを表現する力を確かに吸収しつつあ る。そしてその力はいつしかまた、ポルトガル・ギターをバック にしたがえて唄う時には、必ずや新たな華を歌に加える結果に なると、心から信じてやまない。こじま さとし(音楽評論家)

<ガンバ!秀子ちゃん>

ジャーナルありがとうございました。悲しかったです。ファ ンとして何もしてあげられないからです。きっと子供だったら 「どうしたの秀子ちゃん、泣かないでよ。ボクも泣いちゃうよ」 って一緒になってワンワンやってたかもしれません。が、悲し いかな。大人ってどうしてこう正直になれないものか、只只う らめしいです。

でも正直に打ち明けてくれて嬉しかったです。これでいいん です。どうかこの気持ちだけはなくさないで下さい。ファドで も、シャンソンでも、ブルースでもタンゴでも、「泣く」という ことを忘れたら音楽は死んでしまいます。表情豊かな月田さん を私(達)はファンとして受け入れてるのですから。 おかしい 時は、大っきく口をあけて笑えばいいんです。悲しい時はボロ ボロ涙を流せばいいのです。ただそれだけでいいんです。何か あったら手紙を下さい。助けにならないかもしれませんが聞く ことはできます。愚痴でもなんでも聞きましょう。それで胸の つかえがおりるなら・・・。

カルロス・ゴンサルベスの言葉、ずしりときました。アマリア を支えた男の言葉、何をもってしてもおよばない重みがありま す。きっとアマリアは「しっかりしなさい、秀子。貴女が私の 歌を歌わなかったら誰が歌うの。カルロスに手伝ってもらいな さい。でも私にはならなくていいの。あなた自身の歌(ファド) を歌いなさい」って言ってるのかもしれません。私は、カルロ スの伴奏で歌う月田さんを聴けないでしょう。でも、それがCD となったら遠くはなれたこの六ヶ所村でも聴けて、その時間を 共有できるはず、あせらずじっくり腰据えて思いのたけを歌に 込めてください。本物には反応できる耳はあります。少しです けど。ですから余計なことせず、肩の力ぬいて、ありのままを 見せてください。私がプロデューサーならそれだけ。私の言葉 よりカルロスという最高のプロデューサーがつく様ですから何 をかいわんやですがね。蓮見さんのギターとカルロス、どっしり した「下」と表情豊な「上」、そしてそれに月田さんの歌がのっ かるのですから悪かろうわけがない。期待はプレッシャーにな るけど、ちょっぴりならよいですよね。ガンバ!

(青森/K·H)

[ヒロキちゃん、ありがとう。カルロスを何とか呼んで、コン サートして、その模様をCDに録音して、あなたを始めコンサー トにこられない人に聴いてもらえるようにするよ。ゆーきー、解 けたかぁよー?弘前城の桜、も一度、見に行きたいなー。東京 から春風送ります。

informação

- ●ポルトガルギターがなくなって、まず、マカオ観光局の仕事がなくなりました。現実の厳しさと非情さを思い知らされました。 財政的にかなりの痛手ですが、幸い東京の「マヌエル」での定期ライブだけが残っています。残された仕事を大切に、一曲ず つ精一杯歌ってゆきたいと思っています。
- ●早速に、ライブハウス、コンサート会場の情報等、お寄せいただいた皆様ありがとうございます。ライブコンサート実現までは道のりがありますが、どうか、これからも、長い目で、月田の活動を見守りつづけてくださいますようお願いいたします。
- ●新宿のシャンソニエ「シャンパーニュ」のオーナーでもありシャンソンの訳詞で活躍されている「ムッシュ」こと矢田部道一氏の"「矢田部道一シャンソン詩集」コンサート"に出演することになりました。氏の日本語詩による「涙」(日本語のタイトルは「恋しくて」)とギリシャの歌「ペレーの港の男達」(「日曜はだめよ」というタイトルでメリナ・メルクーリが歌ってヒットした曲です)を歌います。安奈淳、花田和子、井関正人さん他……シャンソン界の大御所の方々に混じっての出演です。

	予約・問合せ:tel/0284-44-4377 料金:3150円 (食事・ライブチャージ込・飲み物別) 19:00 22:00 予約・問合せ:tel/03-3458-9806 (月田秀子ファド俱楽部) チケット:6000円 (フリードリンク)
: 00~18:00/<ライブ>18:00~1 : 00~21:00/<ライブ>21:00~2 ヤンパーニュ」 昇演:15:00 終演予定:17:30	料金:3150円 (食事・ライブチャージ込・飲み物別) 19:00 22:00 予約・問合せ:tel/03-3458-9806
: 00~21:00/<ライブ>21:00~2 ヤンパーニュ」 昇演: 15:00 終演予定:17:30	19:00 22:00 予約・問合せ:tel/03-3458-9806 (月田秀子ファド俱楽部) チケット:6000円(フリードリンク)
: 00~21:00/<ライブ>21:00~2 ヤンパーニュ」 昇演: 15:00 終演予定:17:30	22:00 予約・問合せ:tel/03-3458-9806 (月田秀子ファド俱楽部) チケット:6000円(フリードリンク)
ャンパーニュ」 開演:15:00 終演予定:17:30	予約・問合せ:tel/03-3458-9806 (月田秀子ファド俱楽部) チケット:6000円(フリードリンク)
開演:15:00 終演予定:17:30	(月田秀子ファド倶楽部) チケット:6000円 (フリードリンク)
	チケット:6000円(フリードリンク)
たに加え、ピアノ伊賀拓郎が初参加。柔軟さ	
	に満ちた素直なピアノの響きは、必聴!!
ヌエル」 *要予約	予約・問合せ:tel/03-5738-0125
ライブ:20:30~(約1時間)	料金:6000円(ディナー・ライブチャージ込み)
ヌエル」 *要予約	予約・問合せ:tel/03-5276-2432
JDADE Vol.30	
1)20:30 (2)21:30 (3)22:30	ライブチャージ:2500円 (入れ替えなし)
ヌエル」 *要予約	予約・問合せ:tel/03-5738-0125
ライブ:20:30~(約1時間)	料金:6000円 (ディナー・ライブチャージ込み)
ヌエル」 *要予約	
JDADE Vol.31 J	予約・問合せ:tel/03-5276-2432
D20:30	ライブチャージ:2500円 (入れ替えなし)
アターアプル」	申し込み先:tel/03-3354-8540 (ムジカ)
ャンソン詩集」コンサート"	チケット:S席指定7000円/A席自由6000円
荆演19:00	
ゼリア大正」	問合せ:tel/06-6552-9713
Vol. 9"*別紙チラシ参照	チケット:3800円 (全席自由)
荆演:15:00	(月田秀子ファド倶楽部会員:3500円)
み:tel/06-6552-7053(喫茶「アルマ」	井本)もしくは、月田秀子ファド倶楽部まで
ヌエル」 *要予約	予約・問合せ:tel/03-5738-0125
ライブ:20:30~ (約1時間)	料金:6000円 (ディナー・ライブチャージ込み)
ヌエル」 *要予約	
JDADE Vol.32	予約・問合せ:tel/03-5276-2432
1)20:30 (2)21:30 (3)22:30	ライブチャージ:2500円 (入れ替えなし)
	ライブ: 20: 30~(約1時間) Xエル」 *要予約 JDADE Vol.30」 D20: 30 ②21: 30 ③22: 30 Xエル」 *要予約 ライブ: 20: 30~(約1時間) Xエル」 *要予約 JDADE Vol.31」 D20: 30 ②21: 30 ③22: 30 Pターアプル」 マンソン詩集」コンサート 開演19: 00 ゼリア大正」 Vol. 9"*別紙チラシ参照 開演: 15: 00 公: tel/06-6552-7053 (喫茶「アルマ」 Xエル」 *要予約 ライブ: 20: 30~(約1時間) Xエル」 *要予約 JDADE Vol.32」

fados canções

ADEUS A LISBOA

Letra-João Villaret Musica-A.Rodrigues

Vejo do cais, mil janelas Da minha velha Lisboa Vejo Alfama das vielas O Castelo e Madragoa

E os meus olhos rasos d'água Deixam por toda a cidade Na minha prece de mágoa Esta canção de saudade.

Quando eu partir Rezo por mim, Lisboa Que eu vou sentir, Lisboa Penas sem fim, Lisboa.

Saudade atroz Que o coração magoa E a minha voz entoa Feita canção, Lisboa.

Mas se ao partir Me vires chorar, perdoa Que eu digo adeus à tristeza Para depois rir à toa.

Tenho a certeza, que ao ver As ruas tal qual eu as vejo E esse teu ar de rainha do Tejo Hei-de beijar-te Lisboa.

Hei-de beijar com carinho As tuas sete colinas E vou andar a procura De mim, nas tuas esquinas.

E tu Lisboa has-de vir Aqui ao cais como outrora P' ra eu te dizer a rir O que hoje a minha alma chora.





「ポルトガルギターのカルロス・ゴンサルヴェス氏と」

リシュボアにさよなら

作詞 ジョアン ヴィラレト 作曲 A・ロドリゲス 訳詩 カウド ヴェルデ

波止場から見上げる幾千もの窓は いとしいリシュボアの目のよう 小路の入りくんだアルファマ 城、マドラゴアも見える

やがて私の目に 涙があふれる 別れを嘆く思いのなか 街のそこかしこに残る この愛惜の歌

旅立つとき 私は打ち明ける リシュボアよ お前との 別れのつらさは 尽きることがないと

どうしようもない悲しみと懐かしさで 心が疼く そして私に口ずさむ 歌い慣れたあの歌を

もし別れのときに 泣いているのを見ても許しておくれ 悲しみにさよならを云っているのだから そうすれば あとで笑みも生まれるだろう

ありのままの通りや路地を . 私の瞼にあざやかに甦る テージョ川の妃のような お前の風情に 口づけせずにはいられない リシュボアよ

慈しみをこめて口づけしょう お前の七つの丘に そして そしていつの日か訪ね歩くだろう 自分の姿をお前の街角に路地に

そのとき リシュボアよ お前も姿を見せるのだよこの波止場に昔のままで 私はほぼ笑んでお前に語りかけるだろう 今日 私の魂が涙を流したことを



<編集後記>

「負けない!」そう自らに言い聞かせても、次の瞬間萎えている自分がいる。その繰り返しで春が来て、春が逝く。なかなか自由に飛ぶきっかけがつかめず、むなしく空を見上げる。ああ、またもや、ファンの皆様を不安にしてしまった感ひとしきり。少なくとも歌っているときは、自分が生きていると感じる。そんな時が持てるだけでも幸せに違いない。

月田秀子ファド倶楽部ホームページ http://www.fado.jp/

- ■月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第50号
- ■2006年4月15日発行(季刊:年4回発行)
- ■編集・発行 「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- ■〒108-0075 東京都港区港南1-8-27日新ビル1406号
- TEL&FAX 03-3458-9806